

一途で可愛い花婿は執着イケメンに車内で調教される

肌寒い秋から、ずいぶんと冷え込みが強い冬が訪れた。AKIRA・HIGA SIOのアトリエは寒がりな東尾明ヒガシオキマツのために暖房と加湿器が日中ずっと点けられていて、とても快適な空間となっていた。

デスクに座りながら、一人夢中になってスケッチブックにスーツのデザインを描いていた明は、持っていた鉛筆を机に置くとスケッチブックを両手に持って持ち上げ、目を輝かせながらそれを眺める。

「出来た！」

五ヶ月後にある結婚式場のオーナーから頼まれたホームページ用のイメージ動画に使うスーツのデザインが、やっと完成した。前回は旭と敦だけの写真撮影の依頼であったが、今度は明と新も一緒に動画を撮らないかと式場のオーナーに言われ、二人も喜んでそれを引き受けた。

その時に、また自分の制作したスーツを着て撮影していいと許可をもらった明

は、親友と幼馴染と恋人のスーツを自分で作れることに張り切って、その日からデザインの作成に取り掛かった。

西園新サイエンツラタと両思いになって、週刊誌に記事が載ってしまったものの、危惧していたこととは裏腹に、世間は自分達の関係を祝福してくれていて、お祝いの言葉までかけてくれる。こんな幸せな気持ちでデザインするスーツはきつと最高の出来になるに違いないと思っていたが、それは的中したようだ。

前回のスーツよりいいデザインの物を制作出来た明は、これを早く三人にも見てもらいたいと、リビングに置いてあるスマートフォンを取りに、椅子から立ち上がった。

その時、玄関の鍵が開く音がして、咄嗟に、明は玄関へと行き先を変える。

扉が開くとそこには、黒のチェスターコートに手袋を着けている新が立っていた。寒空の中帰ってきたというのに、背筋は伸びたままで寒さすら感じさせない新を、明はさすがプロのモデルだと感心しながら出迎えた。

「新！ おかえり！」

「ただいま」

新は靴を脱ぎ家にと、小走り駆けて明の腰に手を回してキツく抱きしめる。

寒空に冷えた頬が頬に触れると、明も冷えた身体を温めるようにキツく抱きしめ返して、頬を寄せた。

昨日は、お互い仕事と同棲の準備で忙しく会えなかったため、恋人の触り心地の良いすべすべの肌と体温が尚更愛おしい。

新からする薔薇の香りが明の鼻腔に広がる頃には、お互いの身体はほんのり赤く色付いていた。

頬を離して顔を合わせると、欲情して鋭い目付きをした新と目が合い、透き通った瞳の奥に自分が映し出される。このままではいつものようにセックスする流れになってしまうと、明は慌てて目を逸らして、新の顔の前に手のひらをかざした。

「待って！　ずっと悩んでたスーツのデザインが出来上がったから、見てほしいんだ」

一瞬不満そうな顔をした新は、明の言葉に瞳孔を開いて驚いてから、興奮気味

に鼻息を荒くした。

「前に言ってた、俺達が撮影で着るスーツか！ 楽しみにしてたんだ！」

新は明を抱いていた手を離すと、代わりに明の手を握って、細くて長い指を指の間に絡めてくる。それだけのことなのに、くすぐったい感覚が手から身体を駆け抜けていき、新は本当に自分と自分の作品が好きなんだと実感して、下半身が熱くなっている。

ガッチリと、離れないように手を固定された明は、顔を赤くさせながら、新をデスクまで案内した。

「これなんだけど」

デスクの前に到着して、スケッチブックを渡すと、新はそれを壊れ物を扱うかのように丁寧に両手で受け取った。そこにはデッサン人形が四体描かれており、それぞれ足元には着る人の名前が書かれている。

白のが新、グレーのチェックのが明、デニムブルーのが旭、ダークブルーのが敦のスーツだ。

「凄く素敵だ」

新は食い入るように、スケッチブックを隅から隅まで眺めてから、目を輝かせて明を見ながら微笑む。

「新にそう言われると、自信が湧いてくるよ」

明が微笑み返すと、新はもう一度スケッチブックに視線を戻して、顎に手を当てながら何か考え出した。

もしかして、何かおかしなところがあったのではないか――。

明が不安になりながら新を見つめていると、しばらくして新が口をゆっくりと開いた。

「このスーツは少し敦には勿体無い気がするけどまあ、今回は許してやろう。それにしてもなんで俺のスーツは白なんだ？」

一瞬安心して気が抜けたが、ニヤニヤと笑いながら鋭い指摘をしてくる新に、明は瞬時に顔を赤くさせた。告白するきっかけになった雑誌のインタビューの記事に載っていた写真の新が、白いスーツ姿だったからと気づいていて聞いているのだとしたら、かなり意地が悪い。

「それは、新は肌が白いし、それに……」

「それに？」

新はスケッチブックを机の上に置きながら、ゆっくりと明に近づいた。そして耳元に唇を近づけると、息を吹きかける。その刺激に全身がぞくりと粟立つ。

「撮影で使ってたスーツも白かったし……」

その発言を聞いた新はニヤニヤと笑いながら、明の耳たぶを肉厚の舌先でペロリと舐めた。

一瞬、熱くて柔らかい、ねっとりとした物が触れただけなのに、耳たぶから全身へと熱が広がっていく。

前に耳に陰茎を擦り付けられてからというものの、さらに耳が敏感になってしまったように感じる。

「明。あのスーツの写真お気に入りだもんな」

「ち、違う。新が俺のこと考えながら撮った写真だから」

「ふうん。この前、明の部屋に行った時にあの写真枕元に飾ってあったけど」

耳元でクスクスと笑われると、そこまで知られていたのかと、恥ずかしさで一気に身体中が熱くなっていく。きっと新のことだから、その写真をオナニーで使

つていることまで、察しがついているに違いない。

でも、素直に認めてしまうのはやはり、恥ずかしい。

「あれは、おやすみ言う用の写真で！」

「寝る前に俺とLINEしておやすみ言ってるのに、写真にまで言うのか？」

「うう……」

やっぱり新は勘づいていた。それでいて、写真を何に使っているのか直接聞きたいのだろう。やっぱり意地悪だ。

「ちゃんとやってくれたら、明の望み通りスーツ着ながら抱いてあげるのにな」
顔を覗き込まれて、透き通ったブラウンの瞳と目線が合わさると、自然と吸い込まれそうになり、素直に言ってしまうようになる。

しかし、抱いてほしいだなんてそう何度も言えるほど、まだ明は性に関して大胆になれていない。

「今は恥ずかしいから、当日になったら言うよ」

だから、もう少しだけ待つてほしい。

そんな思いを込めて、明は新の瞳を真っ直ぐ見据えて告げると、新は少し残念

そんな顔をしたものの、すぐに愛おしそうに明のことを見つめながら、手のひらで頭を優しく撫でてきた。

「楽しみにしてるよ」

新は、それ以上スーツについて追求してくることはなかった。その代わりに頭に置いていた手を腰に移動させていく。それを察知した明は、身体をくねらせ、それを躲した。

「あっ！ そうそう！ 冷蔵庫にプリンあるんだった。一緒に食べよう」

そのまま、慌ててリビングへと向かっていく明を見つめながら、新は残念そうにため息を吐く。

「俺はプリンより明の方がいいんだけどな」

「今はダメだよ！ それに、引越しの準備する体力も残しておかないといけなし、明日のデートの計画も立てないよ」と

二人で話あった結果、新の部屋で同棲することに決まり、今夜はその手伝いに新が部屋にくることになった。

そうなる前には、確実に寝る前には体力を使い果たすくらいセックスをすることに

なる訳で、今は体力を温存しておくべきだと明は考えた。しかし、新は違うよう
で不満そうに口をへの字に曲げている。

「俺も手伝うし、ジム行って体力もついてきてるし平気だろ。昨日だって仕事で
出来なかつたし」

「普段から鍛えてる新と俺とじゃ体力が違うの！ それに俺は、プリン食べなが
ら新と明日の買い物デートの計画立てたい！」

そっぽを向いて台所へと向かう明の後ろを、新はしゅんと捨てられた子犬のよ
うな顔をしながらついていく。

少し、言いすぎたかと思つた明は後ろを向いたまま立ち止まって、照れくさそ
うに人差し指で鼻を擦つた。

「膝の上に座るくらいならいいよ」

「やった！」

新は子供のよう嬉しそうに笑つて、明を後ろから抱きしめた。こうやって素
直に喜ぶところが可愛らしい。そして、そんなところが好きだから、新に対して
甘くなつてしまうのだと明は思つた。

「あーん」

新が口の前にスプーンにすくったプリンを突き出すと、膝の上に座っている明は笑顔を浮かべながら差し出されたプリンを口の中に入れる。

すると、ちょうど良い甘さが口内に広がり、甘い物が好きな明はとろけたような笑みを浮かべた。

その様子をじつと観察しながら新は、あることを思い出した。

「こうやって食べさせてると明の誕生日を思い出すな」

「恥ずかしいから、あまり思い出さないで」

運ばれてくるプリンを口の中に入れて咀嚼しながら、明は恥ずかしそうに赤くした顔を伏せる。

「明、凄くいい表情してたのに」

「あまり言うとな膝から降りるよ」

「ダメ」

新は、明の身体を自分に引き寄せて後ろから抱きしめながら、肩に顔を乗せて髪に頬擦りをした。

「新。顔近い」

「明の香り、いい匂い」

新は、首筋に顔を埋めてすうっと香りを吸い込む。その刺激で身体がピクリと反応して力が抜けそうになり、明は慌ててそれを止めさせようと、話題を変えた。「恥ずかしいからあまり嗅がないでよ。そ、そうだ。明日のデートどうする？」首筋から顔を離れた新は、少し不満そうな顔をしながら明をさらに強く抱きしめた。

すると、新の膨らみかけている硬くて熱い股間が尻の割れ目に自然と当たり、明は頬をさらに赤くさせる。

いつもセックスをしているせいかわ、無意識に新の陰茎を求めて尻穴がキュンキュンと疼いてしまい、羞恥でどうにかなりそうだと。

明は、抱いてほしい気持ちを堪えながら、誤魔化すように話を切り出した。

「デート、どうするの！」

明が再度問うと、新は抱きしめる力を洩々弱めた。解放された明はホッと胸を撫で下ろしてから、深呼吸をして気持ちを落ち着かせる。

「そうだな。車借りてドライブがてら、どっか遠くのショッピングモールにでも行こうか。ちょうどお揃いのパジャマも買ったかつし」

「いいね。どんなのにしようかな」

「クマ柄とかどうかな？」

クマ柄と聞いて新と出会った時に、パジャマを着させてもらった上、オナニーまで手伝ってもらったことを瞬時に思い出してしまう。

明が顔を真っ赤にして黙っていると、新は悪戯っぽい笑みを浮かべた。

このままでは、新の思惑通りになってしまおうと、慌てて頭を横に振って気を逸らす。

「えーっ。さすがにこの年齢でクマ柄はちょっと抵抗があるよ」

明が視線を泳がせていると、新が顔を覗き込んでじっくりと見つめてくる。

「年齢なんて関係ないよ。それに、初めて会った時に着てたクマ柄のパジャマも

似合ってたし」

昔のことを思い出しながら、顔を更に赤くさせる明を新は再び強く抱きしめて、お尻にわざと膨らみかけて硬くなった股間を押し当てた。

「あの時、パンツもクマ柄だったよな。どうせならセットで揃えようか。また、俺が履かせてあげる」

耳元に熱い吐息が掛かり、明の耳の形をなぞるように、生温い新の舌先が耳の縁を舐め上げていくと、身体にゾワゾワした刺激が走り、乳首がぷっくりと勃起上がって硬くなってしまう。

明は止めさせようと慌てて話を逸らした。

「そんな恥ずかしいこと、忘れてよ」

「やだ。一生覚えてるよ。今の明もエッチだけど、あの時の明もまた違ったエロさがあったよかったな」

新が嬉しそうに明の耳を甘噛みすると、明はビクビクと身体を震わせる。

「そうやって、エッチな雰囲気させても今はやらないからね」

セックスはしたいけれど、それは今ではないと、明は身体をよじらせて逃げ出

そうとした。

しかし、新に逃さないように抱き寄せられて耳たぶを舌尖で舐められてしまうと、明は全身から力が抜けて、抵抗出来なくなってしまう。

「はあっ。でも、明とくつついてたらちんぽ勃ってきちゃったし、明だっておまんこにちんぽ挿れて欲しいでしょ」

「あっ。ちよつと、擦り付けないでっ」

明は、股間に擦り付けられるちんぽの感触に耐えきれず、身体を捻る。

おそらく下着には濡れたシミが出来てしまっているだろう。

「俺が動くからさ。いいだろ。愛しい明のエッチなおまんこに癒してほしいって、さつきからずつとちんぽが熱もってるし」

「んんっ」

お尻に当たっている膨らみが段々と増していき、尻穴もそれに反応してキュンキュンと疼いてしまう。

新は明が大人しくなったのを確認すると、耳にしゃぶりつき、舌で耳のひだを丁寧に舐め回していく。

濡れた耳を舌全体で舐められたり、耳の穴まで舌先を伸ばして挿入されたりすると、頭がぼおつとしてきて、何も考えられなくなり、発情して息が熱くなっていく。

明は明日のデートに備えてセックスするのを我慢したかったのに、新はそれを許してくれない。

それどころか、耳元でねだってくる始末だ。

「明もズボン膨らんできちゃってるよ。触って欲しい？」

新は耳から舌を離すと、そのまま耳に軽く歯を立てながら、ズボン越しに明の内腿を人差し指でなぞる。

もどかしい快感が身体を走り抜け、下半身が重くなっていく。

「あっ、んっ♡ 触って……っ♡」

明は尻に新の股間を押し付けると、誘うように大きく股を開いた。

「自分からお尻にちんこに擦り付けて、明のエッチ」

「新が……。あっ♡ こんな身体に……。んんっ♡ したんでしょ」

「本当に俺だけのせいかな？」

ズボンの上から人差し指で陰茎の筋をなぞり上げられて、腰がビクビクと震える。

ただ指が這っているだけの刺激では全然足りない。もっと強く触って欲しい――

その思いを伝えようと、明は腰をより高く持ち上げた。

一途で可愛い花婿は執着イケメンに結婚式で調教される

同棲するのに選んだ部屋は、防音が効いている2LDKの部屋だった。

南山旭は仕事から帰り、貞操帯を取ってお風呂に入った後、パジャマに着替えて髪を乾かしてから、先にベッドで座って待っている北尾敦の元へと向かった。

敦は誰かと連絡を取り合っているようで、スマートフォンの画面をタップしながら笑っている。

相手は誰なのだろうと嫉妬しながら敦の側に座ると、気づいた敦は顔を上げて、笑顔で画面を見せてきた。

「旭！ 明が服のデザイン出来上がったから見えてっ」

なんだ、明かと安心して画面を覗き込むと、四体のデッサン人形がスーツを着ているイラストの写真が写っていた。

それを見た旭は渡されたスマートフォンを手を取って、うっとりとその写真を眺めた。

「明がデザインしただけあって、凄くいいデザインだ。俺と敦のやつ色微妙に違うけどお揃だし」

「なんだか本当に結婚式挙げるみたいだな。当日に着るのが楽しみだ。明に良かったってLINE送っておく」

「ああ、頼むよ」

旭からスマートフォンを受け取ってLINEの返信を見ると、すぐに返信が返ってきたらしく、それを見た敦はニヤニヤと笑っていた。

「なんだって？」

「いやーっ。スーツはプレゼントするから汚してもいいって、明もとうとう性目覚めたのか」

なにやら、頷きながら納得している敦を見ながら身の危険を感じた旭は、呆れた表情をしながら敦を見た。

「もしかして、スーツ姿でセックスする気？」

「勿論だろ！ 出来るなら式場でしたい」

「そんなこととして、オーナーにバレたらどうするんだ？」

「オーナーは俺達の関係知ってるんだし、大丈夫だろ」

「そういう話じゃない！」

呆れ果てた旭は、腕を組みながら不機嫌そうにそっぽを向いた。

すると、それを宥めるように、敦は旭の手首を優しく掴んで手を握ってから指を絡ませて恋人繋ぎをしてくる。

「まあまあ。でも、旭だって俺と式場でセックスしてみたいだろ」

握られた手を見ると、そこにはお揃いで買った指輪が光っていた。

それを見てしまうと、せっかく一度切りのスーツを着る機会なのだから許していいのかもしれない、気持ちが揺らいでしまった。

「そりゃ、まあ」

「じゃあ。撮影終わって二人つきりになったらしようか？」

耳元に顔を近づけられて低い雄味の強い声で囁かれる甘い言葉に、身体中にゾクツとした感覚が駆け巡り、熱い吐息が漏れてしまう。

「う、うん」

返事をする、そのままベッドに押し倒されて、敦に触れるだけのキスを落とされた。

柔らかく熱い唇が触れただけで、甘い吐息が漏れて身体が熱くなっていく。

「あっ♡」

「勿論、寝る前にもするよな」

敦は顔を離すと、着ていたコットンパジャマを脱いでパンツ一枚の状態になり、旭の上に覆い被さる。

「す、するから」

ジムで鍛えているせいで、ますます逞しくなった身体に興奮して、ぞくつとしてみ直視できずにいると、敦はニヤニヤと笑いながらその様子を観察した。

「旭のために鍛えた身体なんだから、好きなかだけ見ていいって言ってるだろ」

「シラフの状態で直視するなんて、無理だつて」

「じゃあ、シラフじゃなきゃするんだ」

パジャマの中に手を入れられると、乳首を摘まれてしまい思わず甘い声を出し

てしまう。

恥ずかしさのあまり唇に手の甲を当てると敦はクスリと笑いながら、そのまま乳頭を人差し指でコリコリと弄った。

「あっ♡ んんっ♡」

「ほら、乳首いじっててあげるから、その間見てていいよ」

「んんっ♡ うん♡」

旭はゆっくりと目線を上に向けると、敦の胸筋を見つめた。

前にも増して鍛え上げられた、引き締まった綺麗な腹筋に見惚れてしまう。

そんな旭の手を敦は握ると、自らの胸に押し当てた。

程よい弾力をした筋肉質な肌が手に触れると、それを欲している身体の熱が上がっていく。

「俺の身体触って両乳首、コリコリにしちゃって。旭のエッチ」

「あっ♡ 敦だって……んんっ♡ エッチだろ♡」

「エッチなのは旭にだけだよ」

「あっ♡ あんっ♡」

そう言われて、敦に乳首をギュッと摘まれる。

旭は痛気持ちよさに涙目になりながら、腰を浮かせた。

「そろそろ熟れて舐め頃かな？」

敦は旭のパジャマを捲ると、胸に顔を埋めながら熱い息を吹きかける。

「俺が育てた肥大化エロ乳首。いただきます」

「あっ♡ ああっ♡」

見せつけるように乳輪の周りをゆっくりなぞりながら舐められてから、舌全体を使って大胆に舐め取られる。

熱くてザラザラとした舌が刺激となつて、乳首から身体全体に快樂が流れていく。

「今日も美味しい。旭の乳首舐めると仕事の疲れも取れてくるな」

「んんっ♡ それなら、ああっ♡ もっと……っ。舐めていいよ♡」

「本当？ じゃあ沢山舐めていじらせてもらうな」

敦は嬉しそうな表情を浮かべると、片方の乳首を舌先で転がしながら、もう片方を親指と中指で捏ねくり回した。

「ああっ♡ 舐めながらつねったら♡」

両方の乳首を同時に責められたことで、強い快感に襲われた旭は思わず背中を仰げ反らせる。

「甘イキしちゃったな。さてと、下はどうなってるかな？」

ズボンに手を掛けられて、下着ごと脱がされ下半身が丸見えになる。

既に勃ち上がっている陰茎からは先走り汁が溢れており、それが陰毛を濡らしていた。

それを見た敦は満足そうに目を細めながら、尿道口を人差し指で突いた。

「あっ♡ そこは……んんっ♡」

突かれて指の腹で弄られた陰茎は、与えられた刺激にピクッピクッと震えながら喜んだ。

「カウパーと愛液垂らしちゃってエッチだ」

「だって……敦に乳首、弄られたら……はあっ♡」

亀頭を弄っていた指が離されると、尻穴へと移動していき、突かれる。

その刺激に期待した旭は、クパクパとアナルを伸縮させた。

「ここもたっぷり舐めてやるな」

そう言うと、旭の股に顔を埋めた敦は指で伸ばすように尻穴の皺を広げて、舌先で舐めとった。

生暖かいものが尻穴に這う感覚に、旭は身体を震わせる。

「ああっ♡ らめっ♡ 舐めるのっ、ああっ、気持ちいい♡」

「可愛い縦割れおまんこ……レロっ♡ こんなに……ジュルッ♡ 濡らしちゃっ♡」

ビチャビチャと音を立てながらアナルを舐める舌の動きに合わせて、腰を動かしている、その動きに気づいた敦がニヤリと笑った。

そして、陰茎へと手を伸ばすときびれの部分をしごき出す。

突然訪れた快感に、旭は身体を大きく震わせた。

「ああっ♡ でちゃ、出ちゃう♡」

旭は両方からの強烈な刺激に耐えられず、達してしまった。

勢いよく飛び出した精液は、自身の腹部を汚していく。

その様子を見ていた敦は嬉しそうに目を細めると、それを舐め取っていった。

「旭、気持ちよかった？」

「うんっ♡」

「俺のも舐めてくれるか」

そう言っつて、ベッドに寝る敦の股に旭は返事の代わりに顔を埋めると反り返るくらいに勃ち上がってしまっているカリ高の肉棒を口に含んだ。

口内に広がる敦の味を感じながら、裏筋に舌を絡ませて吸い付いていくと、陰茎がビクツと震えてさらにカウパーを垂らしていく。

もつと敦を気持ち良くさせた一心で、竿にキツく吸い付きながら窄めた唇で締め付けて、時にゆっくり、時に素早く抜いていく。

唾液と我慢汁が混じり合ったいやらしい水音を聞きながら、旭は夢中になってフェラを続けた。

「気持ちいいよ旭」

「んんっ……、んんっ♡ ジュルッ♡ はあっ♡」

「舐めながら、おまんこヒクヒクしちやってるだろ。お尻こっち向けてみな」

「んっ♡ うん♡」

言われるがまま一度、口を離してから、体勢を変えてシックスナインの体勢になると、敦の顔の前に尻を突き出す姿勢になってしまい、より一層身体が疼いて愛液を垂らしてしまう。

「やっぱり。ヒクヒクしちゃってる。可愛い。ここ、指挿れていい？」

「うん♡ 挿れて♡」

尻を指が入れやすい位置まで持っていくと、敦の指が侵入してくる。

一本、二本と徐々に増やされて、指に肉壁を擦られると、下半身が痺れて甘い声が漏れていった。

「あっ♡ ああっ♡」

「ほら、俺のちゃんと舐めないと指止めちゃうよ」

「んっ♡ ふっ♡ んんっ♡」

敦の陰茎を口いっぱい頬張って敦の味を感じながら、前立腺を指でトントンされると、身体が溶けてしまいそうなほどの快感に襲われる。

「一生懸命、ちんぼしゃぶって可愛い。ご褒美に指、増やしてやるな」

三本目の指が入ると、中でバラバラに動かされて尻穴を広げられる。

そして、再び前立腺を擦られると旭は身体を仰け反らせながら喜んだ。

「あっ♡ ああっ♡ あんっ♡」

「旭は前立腺好きだよな。今日も沢山擦ってあげる」

「んっ♡ んんっ♡」

コリコリとした部分に指が当たる度に、力が抜けて興奮してしまい、陰茎を舐めながら口角からだらしなく涎を垂らしてしまう。

我慢が出来なくなつた旭は、後ろを向くと、片手で尻たぶを広げながら、熱を持った涙で潤んだ瞳で敦を見た。

「あっ♡ あんっ♡ もうっ挿れて♡」

その言葉を聞くと、敦は指をゆっくり引き抜いて、尻を広げている旭の手に手を重ねた。

「今日はバックがいい？ それとも対面？」

「身体見たいから……、対面♡」

「じゃあ、体位変えようか」

仰向けに寝転ぶと、覆い被さってきた敦の鋭い獲物を狙うような視線と目が合

い心臓が止まりそうになる。

そのまま、顔が近付いてきたかと思うと触れるだけのキスをされて、尻穴に熱い肉棒が擦り付けられる。

期待する気持ちを抑えきれず、早くと言わんばかりに腰を動かしていると、敦の亀頭を尻穴に宛てがわれた。

「今日はゴム、する？」

「しなくて良いから……んっ♡ 欲しい♡」

待ち望んでいたものが与えられる喜びで、旭は熱い吐息を漏らす。

早く欲しいという気持ちを込めて敦を見つめると、額にキスをされた。

「すっかり、中出しされるの癖になっちゃって。そんなに俺のこと好きなんだ」

「敦のこと好きだから♡ おまんこヒクヒクしちゃってるんだよ♡」

「本当、エッチな身体になったな。って、うわっ」

敦の言葉を遮るように、旭は脚を敦の腰に回すと、だいしゅきホールドをしなから、覚悟を決めて敦と視線を合わせた。

「今日も、敦の硬くて熱いカリ高ちんぽ、奥まで挿れて」

「素直におねだりできるようになって。旭、偉いな。お望み通りにちんぽ挿れあげる」

敦の目の色が変わったかと思うと、両膝を持ち上げられて、チングリ返しの体勢にさせられる。

そして、そのままアナルの縁を割って硬くて熱い肉棒をゆっくりと挿入される。「ああっ♡ あっ♡」

待ち望んでいた刺激が与えられた旭は、肉壁を締め付けて身体を仰け反らせながら震わせて、何回も甘イキを繰り返す。

脳内は真っ白になり、身体の力は抜けているのに、尻穴に挿れてある敦の形だけはより鮮明に分かってしまうのが恥ずかしい。

「入れられただけで甘イキシちゃったんだ」

クスクスと笑われながら、ゆっくりと肉棒の形を覚えさせるように抜き差しされる、カリ高のちんぽが自分の肉壁を擦り上げる感覚に襲われて堪らなくなり、自然と声が漏れ出してしまう。

「ああっ♡ あっ♡ あっ♡」

角度を微妙に変えながらこじ開けるように肉壁を突かれると、その度に体がビクンッと大きく跳ね上がる。

「ナカこんなに締め付けなくても、ちゃんと奥まで挿れてあげるのに。いやらしいな」

そう耳元で囁かれると、余計に興奮してしまい、無意識にアナルに力を入れてしまう。

その反応を見た敦は、さらにピストン運動を激しくして、結腸の入り口をノックしてこじ開けていった。

その刺激に、目の前がチカチカとして意識を失いそうになる程、気持ちが悪くなってしまう。

それでもなお、容赦なく責め立てられた旭の口からは、喘ぎ声しか出なくなってしまう。

「あっ♡ んんっ♡ ああ」

「そろそろ……っ。最奥いきそう」

旭の肉壁のキツイ締め付けに、敦も余裕がなくなってきたのか、激しいピスト

ン運動を繰り返してS字結腸へと亀頭を入れると、旭の身体にキスの雨を降らし
ていく。

その度に、旭の身体はビクビクと震えて甘イキを繰り返して尿道口から少しず
つ精液を漏らしていった。

「あっ♡ んんっ♡ イキそう♡」

「俺も……っ」

そう言うと、敦はさらに深くまで突き上げてくる。

その動きに合わせて、旭も腰を動かして快楽を求めると、顔が近付いてきて唇
にキスをされ、熱い舌で舌を絡め取られる。

「あっ♡ あんっ敦っ♡ 好き♡」

「俺も旭のこと愛してるよ。イクッ！」

その言葉と共に、結腸に生暖かいものが流れ込んでくるのを感じ、同時に達し
た旭の尿道口からも精液が吐き出される。

敦が全てを出し切ろうとするかのように、ゆるゆると腰を動かすと、肉壁が締
め付けて搾り取っていく。

その、動きにも感じてしまい、旭は小さく喘いだ。

「ああっ♡ はあっ♡」

「旭のここに俺の精液たっぷり入ってるんだな」

肉棒が入っている箇所から結腸の部分までを摩られて、思わず腹部をキュンとさせてしまう。

「んんっ♡ うんっ♡」

「ナカまた、キュンキュンさせて、可愛い。もう一回しようか」

ゆっくりと腰を揺さぶられながら、亀頭で前立腺を擦られると、先程出した精液がぐぢゅぐぢゅと音を立てて尻穴から溢れ出てくる。

その音に反応して肉壁を締め付けると、さらに敦の肉棒の形が鮮明に記録されていくのを感じた。